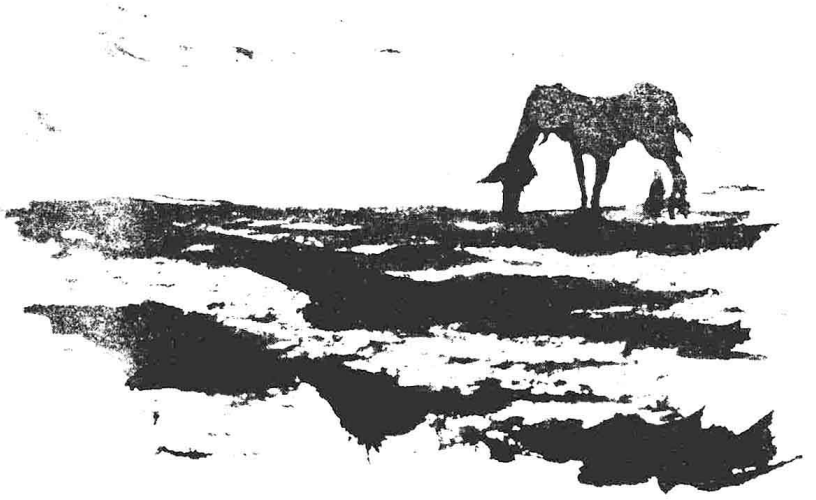
黄土の狼

黄土の狼

伊藤桂一



講談社刊

黄土の狼

昭和40年11月25日　第1刷発行　380円

著者　伊藤桂一

発行者　野間省一

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　有限会社大光堂

発行所　東京都文京区音羽町3－19　株式会社講談社

電話 東京（942）1111（大代表）振替東京3930

© KEIICHI ITO 1965 PRINTED IN JAPAN

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目次

黄土の狼　一
黄土の滝　五五
夜の声　八九
故山への出発　一〇九
波と鷗　一三五
夾竹桃の咲くころ　一四三
ボンタン実るとき　一六七
名を呼ぶとき　一八九
山麓の祭　二〇七
あとがき　二二五

黄土の狼

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

北支那山西省五台山は、文珠菩薩を祀る仏教の聖域で、浙江省舟山列島の普陀山、四川省の峨眉山、安徽省の九華山などとともに、中国四大霊山の一として著名である。

五台山を中心とする五台山塊は、南へ下るに従って広大な黄土盆地となるが、さらに南へ進んでふたたび、荒寥たる山容を呈して、北部山西省の山岳地帯を形成する。五台山から南へ約二百キロで五台城がある。黄土の山層を背景に、突兀としてそびえる堅固な城壁をめぐらした伝統ある古都だ。

――その日の午後、一人の女を驢馬に乗せた日本軍の一隊が、五台城の東門を出て、黄砂と砂礫の道を南へたどりはじめていた。

一行は、大津少尉を長とする十二名の編成で、五台城の大隊本部へ投降してきた、八路軍の女兵を引取りに来たものである。五台山系は本来、閻錫山の率いる山西軍の地盤だが、五台城付近には中共八路の第二集団軍の一部が、事変当初から執拗なゲリラ戦を展開していた。かれらは一望塁々たる黄土の山塊を積みかさねた、満足には眼を慰める樹木すらない風景――そこにさまよう飢えた狼のように、きわめて激しい戦意と敏捷な行動力とをもって、日本軍の虚を衝くことにのみ奔念してきた。

もちろん、八路軍の軍紀の厳正さについては定評があったが、その組織の中から一人の女兵がこぼ

れ出てきたことは、大津がこの地方へ着任して以来、はじめて見聞する出来事であった。女を乗せた驢馬のほとりに付き添って歩きながら（案外これは厄介な荷物なのではないか）と大津は考えていたのである。

この地区の警備に任じていたのは、崞県に司令部を置く独立混成第×旅団で、五台城には大隊本部があり、そこから西へ大山塊を迂回した地点にある北高洪口という山岳の部落に、大津の所属する中隊本部があった。北高洪口は敵のゲリラに備えて大隊が位置した重要な拠点で、いわば最前線である。昨日の午後、大隊本部から無線で、北高洪口に連絡があった。

八路ノ女兵一、投降シ来ル。第二中隊本部ハ該捕虜ヲ収容シ、調査ノ上密偵トシテ使用スベク考慮サレタシ。

くわしい事情は、今日の午前五台城に着いてから、大津が直接大隊長にきいた。実をいうと、大津は、中隊の情報担当をやっていたし、八路の動静についてはかなりよく知っているつもりだった。従って、女兵が投降してきたと知ったときに、裏を返して疑ってみることは一応忘れなかった。大隊長の須之宮少佐は、大津にとっては原隊以来の気楽な先輩であり、遠慮なくものいえる仲である。五台城に捕虜引取りの一隊を連れてやってきたとき、途中で本部付の下士官と逢って、みちみち概略の状況をきいた。女は抗日大学出身の、八路の娘子軍所属の一員で、兵員としては相当優秀な素質をもっているらしい。日本軍に対しては終始協力的な言動を示している――ということだった。

大隊長室へ行って、須之宮少佐とさし対ったときにも、ほぼ同じことを教えられている。須之宮は、女兵投降のいきさつを、次のように説明した。

「抗日戦に疑問を抱きはじめた――といっている。八路軍内部での複雑な事情もあるらしいが、それについては語ってくれない。大東亜共栄圏の確立に関心を深め協力していきたいらしい。遊動中、日

本軍の評判が案外いいことに、自身の考えを直す動機をもったというんだが、どの程度信憑性があるかについては、君が直接当ってみることだな」

「どっちみち、企みがあってのことですよ。奴らは思い切ったことをやりますからね。ひと目みりゃ大がい、察しはつこうというもんです」

頭から信じていないふりで、即座に大津はいい切ったが、すると須之宮少佐が少し笑った。あとで大津は、人の悪い男だ、と苦笑しながら思ったものだが、須之宮はそのとき

「ひと目みりゃどうだと？　さっきから君は見てるはずだが」

といって、室の隅で茶を淹れている女を、眼で示したものである。大津はもちろん室に入るなりその女を眼にしたが、それは大隊長が使っている阿媽（あま）であり、夜は娼婦になるものとあっさりきめ込み、なかなか趣味のいい女をみつけたものだ、ぐらいにしか考えなかったのだ。しかしそれが、八路の女投降兵、李春英だったわけである。

自分のいったことはみなきかれてしまったかと、大津は少しうそ寒い気になった。というのはその女は、大津が当初抱いてきた常識では、どうしても八路の女兵とはうなずけなかったのである。元来中国美人というのは、やせて細おもてで眼のつりあがった色白が上質とされているが、その女はどちらかといえば丸顔で愛嬌がある。小柄で、どこかいじらしいものが匂っていて、日本の女に似ている。ゲリラと一緒に行動している娘子軍とは思えない。抗日大学出身ときいていたので、すさまじく戦闘的かつ男性的な容姿をしているものと予想していたのが、完全にひっくり返され、大津はしばらく唖然として女をみていたものだった。

「日本語はほとんど通じんよ。みんな通訳任せだ。君が引取りにくる委細はさきに話してある。ま、せっかくの獲物だ。大事に扱うんだ。どっちみち君の担当だろ？」

女は二人に茶を淹れてきたが、そのとき大津をまっすぐに見て挨拶をした。悪びれている様子が少しもなく、そのまま真の投降兵としての意識がとどいてくるようだ。女である点も加えて、大隊長は並の投降捕虜と違って、ごく家庭的な優遇を与えていたものだろう。それが大津にもよくわかった。

大津が任官してから、まだ一年余りにしかならない。ここの風土にも大分馴れているし、危険な生き方もかなりしてきている。が、いずれにしろ二十四歳という年齢であることは事実だ。女の、まっすぐに自分をみつめてきた視線に、淡いたじろぎをかんじたのは、そこにふと、敵味方の意識を忘れさせる何かがあった、といえないこともなかったようだ。だいいち、素直にいって、李春英は美しかったのである。

李春英を収容して驢馬に乗せてからも、大津の心のどこかに、妙にひっかかっているものがあった。何となしだが心の奥に、少しまぶしく、ゆらめいているものがある。女を運ぶ、という任務に対する、心の張りのなかに、それは自分だけの秘密のように在るのだ。城門を出るとき、だから彼は、カッと灼きつける夏の陽を、ごく爽快なものに、その額に受けとめたのである。

李春英は、小さな驢馬の背の上に、チョコンとまたがっていて、それほど緊張した顔色もしていなかった。無表情だが、のんびりとしているようにみえる。日本軍に投降してきたという、優越感をもっているようにさえうけとれた。一行は黙々としばらく進んだ。春英は、ここらの土民の娘が着ているような、粗末な綿服を着、袴下をはいているにすぎない。布靴はなんの飾りもない男物だ。そこにだけ彼女の、兵隊らしい感じが残されていた。

三キロばかり南下すると、最近トーチカを築いて分屯隊を出している、閣子峯という小部落へ来た。少しばかりの民家がある。そこまで来て大津は「小休止」を命じた。

「何かあったのかね、隊長」

と、先に立っていた久村軍曹が引き返してきた。この男は、少し気に入らないことがあると、いちいち文句をいいたがる。

「ちょっと待っていてくれ。すぐ帰ってくる」

大津は笑い残すと、左へ、傾斜を少しばかりのぼって行き、手近な民家を訪ねていったようだが、やがて一枝の夾竹桃をもって出てきた。豊かな葉の間に桃色の花が咲きそろっている。北支那の夏の花だ。大津は歩きながら、何気なく、民家の軒先にある一樹の夾竹桃をみとめたのだ。なぜそういう気になったのかふしぎだが、ともかくそれを一枝欲しかったのだ。大津は手にしたその一枝を、だまって驢馬の背にいる春英に渡してやったものである。

春英も、ちょっとそれには面くらったらしかったが、花を受けとると、ごくしずかに「謝々」といった。別に微笑をみせるようなこともなかった。大津をみる眼に、かすかに潤みをみせただけだ。

「気は確かなんだろうな。うちの隊長は」

道ばたにもたれて休んでいた上等兵の高場が、そういうなり起ったが、言葉には裏腹の意味がある。彼は傍らにいた井沢一等兵をうながすと

「おい。斥候に出るぞ。こういう日には必ず変ったことがあるもんだからな」

それから大津の方へ向き直り、どう考えても剽軽(ひょうきん)にみえる顔付をして捧げ銃をし、そのまま井沢と並んで先に歩き出した。戦闘帽のうしろに垂らしている防暑布が、ヒラヒラ風を喚ぶほどの急ぎ足だ。大津は苦笑して久村をみた。

「うるさい奴ばかり多くて、隊長も楽じゃないね。五台城の姫君に花束ひとつ気楽にあげられんとはね」

大津と並んで歩き出しながら、久村は銃をあべこべに担ぎ直した。銃身の先をもって、床尾鈑(はん)をう

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

しろにやってかつぐと、しごく持ちいいのである。そういえば、大津を除くほとんどの連中が、銃を逆にかついでいるのは妙な光景だ。もともと大津という男は、部下を掌握するのが先天的にうまいので、行進中列を乱そうと、途中でいなくなろうと決して文句をいったことがない。つまり、奴らはほったらかしておいても、役に立つときは必ず役に立つ、と相手を先に信用しきっているので、野戦に馴れた兵隊ほど、その扱い方が嬉しいのだ。とくに久村は関東軍から廻ってきて大津の小隊に配属されてきたのだが、すっかり気が合っていて、大津は飲むと

「おれはいつかお前を小隊から追い出してやる。必ず追い出してやる」

というのが口ぐせだった。つまり久村のような奴がいると、いつこちらが死んでも間違いなくあとの指揮を引受けてくれるので、安心がある。おかげで先に死にそうな気がしてならん——というのがその理由なのであった。「大丈夫だよ、隊長。いよいよのときは必ずおれの方が、手か足か、あまり痛くないところを先にやられる。約束しましょう」

久村も大津並の酒豪で、すっかり酩酊している大津の肩を抱いて慰めるのがいつもの例だが、大たいこんな肩ひじ張らぬところが大津の小隊の気風で、こういう有無相通じた信頼感がないと、便衣に身を変えて五日十日と、敵地をさぐり歩くような情報任務は果せない。若い割に大津の、小事に拘泥しない大陸的な気質が部下に受けている訳だが、そのかわり女捕虜に夾竹桃を与えるような場面になると、さすがに大津も、内心少々の面映ゆさをかくし得ないところのあるのはやむを得なかった。

閣子峯からさらに三キロ南下すると東茹村という小部落があり、ここから道は次第に西へ曲り、と同時に両側の山塊が道をせばめて、山西特有の黄土の垂直断崖を形造ってくる。それは全く爪を立てることもできない崖が、すさまじい高さで谷間の道を挾んでいるのである。この峡谷を二キロ抜けると、この地区でもっとも危険な、小盆地へ出る。そこは四方から山塊が迫っていて、その合間を、遠

く五台山に源を発する小清流が一条南流しているのだが、徒歩で渡れる水深ながら、河幅を含めた平地が百メートルもある。四方の山頂から見通しの地点で、部隊がこの地区に駐留して以来もっとも犠牲の多かった場所だから、一時はここを「冥途の河」と呼んでいたほどだ。といってもここを通過しない限りは、北高洪口へ到りつくことが不可能だ。五台城を出たときから、この小清流をどう渡るか、ということが、大津の最大の関心事であったことはたしかなのだ。ただ峡谷中の通過は、断崖の上部は足場の悪いため敵ものぼれないから、攻撃される不安はない。小清流を渡る場合だけが問題なのだ。それも河の、全く中心へ隊列がさしかかったときに、一せいに周囲からチェッコの掃射が見舞ってくるという訳だ。

陽は中天にきらめいているから、峡谷の底まで明るい。ぐるりは奇妙に静かだ。峡谷をほぼ尽きかけるころ、先に斥候に出ていた高場が、一行の方へ歩みもどってきた。高場は大津のところへくると、さかさまにかついでいた銃を下ろし

「あぶないですよ、隊長」

といった。

「いるのか？」

「いますね」

「どうしてわかる？」

「よくよく調べたが、鴉が一羽もおらんです」

高場のいうのはこうだった。ここらは五台山麓ほど鳥や獣はいない。しかし小清流にのぞむ台地には、いつでも深山鴉（みやまがらす）が棲みついていて、グゥーグゥーとうるさく鳴いている。それが一羽もいないのは、人影におびえて逃げているからだ。ここには断崖のどこかに巣を作っている雉子鳩（きじばと）もいて、平穏

なときはデ、デ、ポーポーとのんきに鳴いているものだが、もちろん鳩の声もきこえるはずはない。
「絶対に待ちかまえているよ、隊長。どうしても出るんだったら、自分が先に出ます。そのかわり自分がやられたらあきらめてください」
「わかった。大休止にする」
高場には一種の斥候趣味があって、勝手に前に出たがるが、おそらく敵情の判断に自信があるのだろう。大津が一行を休ませると、彼は双眼鏡を貸してくれといって、峡谷の出口の一角にへばりつくようにして、敵情をさぐりはじめたようだ。大津はやむなく夜を待つつもりで、自身驢馬から春英を助け下ろしてやった。ひどく弾力のあるやわらかい身体なのに「そうだ、女だったのだな」とそんなことを改めて驚いてみたりした。峡谷の入口に歩哨を一人出したあとは、みんな勝手にごろごろ眠ってしまったが、三十分余りもたってから、高場が駈けてきた。
「隊長。やっとみつけたです。人影がひとつ動いた。根気くらべだね。奴ら、どうやら奇襲を断念したんじゃないかと思います。おれの考えじゃ、この夾竹桃のねえさんと、ちゃんと連絡があったんだと思うね」
高場はそこで、得意気な顔付をして、大津の脇に腰を下ろしている、春英をジロっとみた。
「八路兵をみつけた」
と大津は、中国語で春英にいった。そのとき春英は、黙って前方をみつめていただけだ。なんの表情も読みとれはしなかった。しかし、なんの表情もみせていないその表情の底に、ほとんどカンによる判断でだが（何かあったな？）というものを、大津は見抜いたように思う。その表情は企図を見抜かれて惜しかったという無念さのような、また、それを当然とするあきらめのような、さらに、自分は知らなかったが疑われても仕方がないという感情、そしてさらに、奇襲を受けずにすんだことへの

全く根拠のない安堵――それらが実に、春英の心の奥の奥で、微妙にまじりあい、とざされた表情に、あまりにもかすかな波紋を投じていたのだろう。そうして、奇襲を受けずにすんだことへの全く根拠のない安堵のなかには、もしかすると、夾竹桃を折って与えてくれた大津と呼ぶ男への（山肌の遠くを舞いのぼって行く蝶をみているほどな）ごく淡い関心のようなものが、秘められていたのかもしれなかった。

――陽の落ちるのを待って、一隊は無事に清流を徒渉した。

春英を密偵として利用することにきめ、手筈をととのえて山に帰すとき、大津には（これで終りかもしれない）という一抹の不安感、というよりむしろ寂莫感というものが、つきまとってならなかった。

春英を北高洪口へ伴ってきて、調査を重ねているあいだ、むろん春英は何事においても日本軍への協力を約束している。それでいて彼女の姿勢の背後の、眼にみえぬ部分に、しょせんは信をおきがたい八路の要員なのだ、という疑念だけはどうしても彷彿した。ただ、春英に対する調査の交渉を重ねて行くうちに、大津は、自身の立場とは別個のところで、彼女に対するある種の親睦感を抱きはじめるようになっていた。それは彼女の今後の動向の如何にかかわらず、人間同士としての交流が、次第に深まって行くことをどうすることもできなかったのだ。

だいいちに春英は思いのほか素直で、五台地区における八路の兵力の配置や行動の実際についても、大津の問いに対して少しも淀みなく答えている。少なくも春英の言葉を通じての限りでは、日本軍への完全な協調を信じるよりほかはなかった。ただ取調べのあいだに、彼女がふと口をすべらせた

のは、八路のなかに彼女の愛人がいる、という一事であった。このことは大津に複雑な感動を与えた。

春英に対する調査は、中隊所属の鮮人通訳の金勇方を介して行ったものである。春英は、自身が日本軍への投降を意図したとき、いちばん心残りだったのは愛人と別れねばならぬ、ということだった、と述べた。相手は楊子岳という工作隊の指導員だが、春英の話しぶりから察するに、彼女は子岳を他の女党員と争い、事実上子岳を諦めて山を去らざるを得なかった——ということであるらしかった。大津はそれをきいたとき、荒れた山肌を縫って抗日戦に奔走している八路軍の中においても、人間感情はかわりない様相をつづけているのだと、それを興深く思ったものであった。(もっとも大津は楊子岳という男の存在を、絶対的な事実として認めた訳ではなかったが、春英の表情をみつめている限りにおいては、どうにも疑う余地がなかったのである)

「山へ帰ったら男に逢うつもりか」

と、大津はたずねた。

「逢います。私も女ですから。でも、男に惹かれて山に残るということはありません。男はもう私のものではなくなっているのです」

「日本軍に投降してきたことについて、向うで裁判にかけられる心配があるのではないか」

「私のこしらえていた情報網があり、直接八路に接触することはしません。すれば捕まります。そのことは、私の今後の行動をみていただければわかると思います」

大津は、春英を山に帰すとき、夜更けだったが、ひとりで山の外れまで彼女を送っていった。北高洪口に春英を収容してから二週間経っていた。

「先生(シーサン)は私を疑っていますか?」

と、山の外れに来たとき、春英はかえりみて大津にいった。二週間のあいだ、連日顔をつき合わせて何かと話し合ってきた親しみが、春英の心にも、義務とは別個なところで、あたたかく宿されているのが読みとれた。

「帰ってこなければ帰ってこなくてもいい。それは仕方のないことだ。しかし、役に立ってくれるものと信じている」

十分には意のとどかない中国語だったが、丹念に、大津は自分の気持を伝えた。そして春英が去って行くとき、大津は、自身の中の一部が、ともに奪い去られて行くような、説明しがたい感情をとどめ得なかったのだ。

――この二週間のあいだ、春英は、大津の小隊のなかにまじって、ともに起居してきた。

北高洪口は、南に向いた片麻岩系の岩山の斜面を利用した部落で、要害という点では恵まれていた。ここらには山西南部にみられるような山地の穴居はほとんどない。建物は土壁を背にして母屋があり、中庭を囲んで、他の三方に房子（棟）が建っている。どこにもみられる典型的な、この地方の家屋構造だった。たとえば大津の小隊に与えられている一廓にしても、母屋は三室が並んで一棟となり、他の棟にはそれぞれ兵隊たちが住んでいる。兵室は仕切りをぶち抜いてアンペラを敷き、ごろ寝をするわけだが、勤務に出る連中も多いから、ほぼ一個小隊が住めるのである。

春英は、北高洪口へ着いて大津の小隊へ収容されるときまってから、友軍の一員としての待遇を与えられた。今後八路の動静をさぐる密偵として活躍して貰うためには、むしろ有力な一員であるべきはずだった。大津は自身の責任において春英をあずけられたとき、気が変って逃げられてしまうのではないか、という若干の不安を抱かざるを得なかったが、その底に、自身の誠実な説得で必ずうまくやってみせる、という抜きがたい信念のようなものがあった。春英と接触して行くことに、ふしぎな

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com